

国際交流プログラムを評価するルーブリックの開発

富田 英司[†], 近森 憲助[‡], 中山 晃[†], 大谷 千恵[#], 山本 昭夫^{*}, 小野 由美子[‡]

† 愛媛大学
‡ 鳴門教育大学
玉川大学
* 学習院高等科

Developing A Rubric for International Exchange Program

Eiji TOMIDA[†], Kensuke CHIKAMORI[‡], Akira NAKAYAMA[†],
Chie OHTANI[#], Akio YAMAMOTO^{*}, Yumiko ONO[‡]

† Ehime University
‡ Naruto University of Education
Tamagawa University
* Gakushuin Boys' Senior High School

問題と目的

近年、本邦からの留学生数は減少傾向にある一方で、大学間の国際交流協定を通じた海外渡航の学生数は徐々に増えていることが報告されている(河合, 2011)。河合(2011)はこのデータから、今は大学が組織的に留学生を増加させようとしていることが背景にあると見ている。また、2014年には、グローバル人材育成を掲げた「スーパーグローバル・ハイスクール」(SGH)の指定、「スーパーグローバル大学創成支援」の採択、更に文部科学省、日本学生支援機構及び民間企業との協働で立ち上げられた海外留学支援制度「官民協働海外留学支援制度～トビタテ!留学 JAPAN 日本代表プログラム～」の募集が始まった。このプログラムは、学生自身が留学を自発的に企画することができることに加えて、留学費用の全額を支給するという柔軟なものである。また、企業が支援していることで、卒業年限を超えたとしても海外で多様な経験を積んだ学生を採用したいというメッセージを応募学生に投げかけている。このような動きによって今後、留学が増加していくことが予測される。

大学が組織的に学生を海外に送り出そうとするとき、国際交流に参加する学生層はこれまでと異なり、その幅は急激に広がることが予想される。つまり、これまででは留学のために独自に準備を進め、教員やスタッフの支援をほとんど得ないで留学を実現するような学生が多かったのに対し

て、「海外を経験してみたい」「大学の作ったプログラムだと安心して参加できる」「大学が応援してくれるので参加してもよい」「語学は自信がないけれども大学が支援してくれるなら海外に行きたい」という学生が増えてくることが予想される。このような参加学生の幅広さにあわせるためには、大学の実務担当者は様々な支援策を用意し、あり得るトラブル等を想定してプログラムを開発することが求められる。

以前の海外留学では、参加者自身が本人の手で必要な情報を集め、準備を進めるケースがほとんどであったが、この新しい状況に対応するには、国際交流プログラムの開発や運用に関するノウハウの蓄積が重要である。

以下では、このようなノウハウが重要になってくる背景を教育機関サイド、学習者サイド、そして行政サイドの3点から論じたい。なお、ここでいう教育機関には大学だけが含まれる訳ではない。一部の先進的な取組は中等教育課程でも進められていることから、中等教育課程を扱う教育機関も本研究の検討対象に含まれている。そのため、本論文では、学生や生徒など特定の学校段階に限定される呼称では不適切な場合に、学習者という用語を用いている。

教育機関サイドから見た場合、教育実践実務に関するノウハウの蓄積は、それらを組織内外で共有すると同時に改善するための視点を提供するという点で特に重要である。教育機関同士がお互いの持ったノウハウを十分に情報交換することなく、国際交流プログラム開発に取り組んだ

り、1つの同じ機関の中でも相互に情報交換したりすることなく、担当者ごとにそれぞれが苦勞しているということがしばしば見られる。各プログラムの実践で得られたノウハウや知恵が他に活かされることなく、忘れられてしまうため、より広い視野で見たときにはノウハウが担当者個人で蓄積されるだけでそれらが共有されていかないということは大きな損失であると言える。加えて、プログラムの運用上のような工夫が重要であるかという知識が予め明確であれば、それと現行のプロジェクト運用とを比較することで、どこを改善すればよいかも明らかになる。以上のようなことから、それぞれの担当者が蓄積したノウハウが学内外で共有されるための仕組みはより質の高いプログラムを開発する上で重要である。

学習者サイドから見た場合、あるプログラムがどのような学習目標や参加者像を持っているか、参加の前提として何を求めているか、理解するための枠組みがあれば、特定のプログラムに対する募集者と応募者の間のミスマッチは起きにくくなると考えられる。加えて、複数用意されているプログラムのうち、どれが質的に高い内容を備えているか判断するための枠組みも学習者サイドにとって有益である。

そして、日本学生支援機構のような奨学金を提供する行政サイドにとっても、増加傾向にある様々なプログラムのうち、内容の面で優れたプログラムを判断する方法がないとどのプログラムを優先して支援すべきか判断することが困難であり、公平な資金配分が難しくなる。優れた交流プログラムの特徴がどのようなものであるかという知識があることで、優先して支援すべきプログラムを選考する際の尺度を提供することにも繋がる。

このように、教育機関、学習者、行政のいずれからみても、国際交流プログラムの開発や運用に関するノウハウの蓄積が重要であると考えられる。そこで筆者らは国際交流プログラムの中でも特に3か月未満の短期渡航プログラムを主に検討の対象として、そのようなノウハウを蓄積するための理論的枠組みの開発を進めている。

より幅の広い学習者は3か月未満の短期のプログラムに参加することが多く、教員がプログラムの詳細を検討・実施するのもそのような短いプログラムであることから、本研究の筆者らは3か月未満の短期渡航プログラムを検討対象とする。

3か月未満の短期渡航プログラムのノウハウを蓄積する理論的枠組みは様々な形があり得るが、ここでは国際交流プログラムを評価するツールとして、後述するようなルーブリックという形態を採用している。

ここで言う評価とは評価の結果を示すためのものではない。本来、評価とは評価対象の潜在的な能力を最大限に引き出せるよう評価対象やその周囲についての情報を収集し、その情報を評価対象や周囲の改善に役立てるために行

われる活動のことを包括的に指す用語である（香川大学教育学部中川恵正研究室, 2015）。国際交流プログラムの質に関して言えば、本研究が開発する評価ツールはそれを用いることによって、評価対象となるプログラムに関する情報を収集し、改善することに役立つものであることが重要である。このような本来の意味での評価を実現するためのツールとして近年注目されているのがルーブリックと呼ばれる評価手法である。そこで、筆者らはそのようなツールとして、国際交流プログラムを評価するルーブリック（RIEP: Rubric for International Exchange Program）の開発に着手した。本研究の目的は、このRIEPの開発についてその進捗を報告することにある。

ルーブリックとは

ルーブリックとはパフォーマンス評価のための1つの手法として発展してきたものであり、目標に対する達成度を測定するための具体的な基準を記述し、リスト化したものである（田中, 2008）。例えば、プレゼンテーションの能力を測定するためのルーブリックでは、アイコンタクトについての評価項目が含まれているかもしれない。プレゼンテーション中のアイコンタクトに関する評価基準としては、例えば次のように記述することができる。(A) 聴衆全体に発表が届くように3～4か所を順番に視線を向けているのに加えて、強調すべき内容を伝えている時はよりしっかりと聴衆に目を合わせている。(B) 聴衆全体に発表が届くように3～4か所を順番に視線を向けている。(C) 聴衆に向けて話してはいるが原稿やパソコンを見ている時間が4分の1以上を占めている、もしくは1か所しか見ていない。(D) 聴衆に向けて話していない。

典型的なルーブリックでは、このような評価項目が複数設けられている。機能面から言えば、ルーブリックは次のような特徴を持っている。

- (1) **学習目標の共有促進**: ルーブリックの最高段階やその次の段階の記述は、学習目標を具体化したものであるため、教師が想定する学習目標を学習者に効果的に伝達することができる。
- (2) **学習者の自己評価及び改善の促進**: ルーブリックの各段階の記述はその段階が求めるパフォーマンスが何であるかを具体的に示すものであるため、学習者の自己評価や自己改善の際、具体的に次に何ができるようになれば一段階高い評価ポイントに到達できるか学習者自身で把握することができる。
- (3) **教師の評価観探索促進**: ルーブリックを作成するためには自分たちがどのような学習者パフォーマンスを望ましいと思っているかという評価観を探索し、それらを表現するための適切な表現に結びつけなければならない。そのため、ルーブリック作成を通して教師が自らの評価規準・基準をより明確にすることができる。

(4) 評価の信頼性の向上：評価対象となる学習パフォーマンスが具体的に記述されるため、評価規準及び基準に関する評価者間での共通理解を確立しやすくなる。ただし、この機能が効果的に働くためには教師間でルーブリックの共同作成のための時間を長期に渡って確保する、どの範囲でルーブリックが機能するか制約を明らかにする等、制限が多いことに留意されたい。

国際交流プログラムに適用することの意義

ルーブリックを国際交流プログラムに適用すれば、上述の4つの特徴的機能は国際交流プログラムを運用する上で以下のような意義を持つと筆者らは考えている。

(1) 学習目標の共有促進：「学習目標」とは、国際交流プログラムを開発・運営する教員にとっては、どのような効果や成果をもたらすプログラムにしたいかということに置き換えることができる。海外渡航プログラムを実施するとき、特に3か月以下の短期のものについては、運営を担当する教員やスタッフは参加者の募集と選考、安全確保からスケジュールの検討、準備教育などで業務過多となりやすい。そのため取り組むプログラムについて、どのようなプログラムが質の高いものであるかについて、担当者間で共通認識を作る際にルーブリックがあれば役に立つ。

(2) 学習者の自己評価及び改善の促進：国際交流プログラムの開発という文脈では「学習者」というのはプログラムを企画・運営する教員やその他の担当者に当たると解釈することができる。国際交流プログラムの質に関するルーブリックが用意され、そこにどのような具体的な事柄を国際教育プログラムの企画・運営担当教員らが目指しているかということが明示されているとすれば、彼らはその事柄を参照しながら、学生の自己評価や自らの観察等も踏まえて自己評価を行い、さらにプログラムを改善することができる。

(3) 教師の評価観探索促進：国際交流プログラムの質に関するルーブリックを作成することになれば、プログラムを開発・運営する教員はこれまで明文化されることがなかったような暗黙の知識や価値などを明確にすることができる。

(4) 評価の信頼性の向上：これまでどの国際交流プログラムが効果的なものであるかについて評価するための基準はほとんど開発されていない。そのため、国際交流プログラムの質に関するルーブリックがあれば、信頼性の高い評価が可能になるための基礎ができることになる。

本稿が提案するルーブリック RIEP の独自性

本論文で提案するルーブリック、RIEPはいくつかの点で典型的なルーブリックとは異なる。ルーブリックは通常、縦軸に評価項目が、横軸に評価段階が示され、マス目に具体的記述が記載されているものがほとんどである。し

かしながら本稿で提案するルーブリックでは、評価段階を設定するものではなく、ただ次元とねらいごとにプログラムの質を高める要素を列記することになる。したがって、一般的なルーブリックに比べてより高次の概念的枠組みを提供するものであると言える。今後、本稿が提案するルーブリックが発展・分化する中で、一般的なルーブリックに近い形態のものが開発される可能性もある。

方 法

本研究は仮説を立て、その仮説を検証するための方法をデザインし、収集したデータを分析して実証的な知見を得るというタイプのものではない。本研究はむしろ若者の国際交流プログラムに取り組んできた筆者らの経験知を集約し、それを実用的な教育的ツールの1つとして提案するという形を採用している。

以下ではこの取り組みを実施するためにどのように筆者らが協議の場を設けてきたのか、またどのように作業を進めてきたか説明したい。

協議の手続き

本論文に関連するプロジェクトは、日米教員養成協議会 (JUSTEC: Japan-U.S. Teacher Education Consortium) の参加者を中心に進められているものである。JUSTECは1987年に日米の有力大学の学部長達によって、教員養成や教師教育における研究や共同研究を促進していくために設立された組織であり、現在日本側では玉川大学(東京都町田市)が、アメリカ側ではピュージェット・サウンド大学(ワシントン州タコマ市)がそれぞれ基幹大学を務めている。

平成25年6月に、このJUSTECの日本側の参加者に向けて『国際交流プログラムの質評価規準』準備検討会のご提案』というEメールを配信し、参加者を募った。その結果、この論文の筆者らがこの取り組みに参加することとなった。

検討会の第1回は平成25年10月26日(土)、第2回は平成26年6月14日(土)、第3回は平成26年8月5日(火)に玉川大学にて開催された。本論文はそれまでの議論を通して構成された国際教育プログラムを評価するための枠組みを発表するものである。なお、この論文の一部は2014年9月18日(木)から21日(日)に開催された第26回日米教員養成協議会年次大会(開催大学:東京学芸大学)において発表された(Tomida, Chikamori, Nakayama, Ono, Ohtani, Yamamoto, 2014)。

ルーブリック作成の手順

ルーブリックを作成するための手順として筆者らは次のように(1)~(6)の段階を想定した。

(1) 評価次元のリスト化

評価次元とは国際交流プログラムを評価する際にどの側面から評価するかを示すものである。筆者らは、次のような次元を想定している：参加者の選考、受入機関の対応、参加者への事前・事後教育、プログラムの内容、受入先での地域連携、オンラインの活用、参加者の学習成果。

(2) 国際交流のねらいのリスト化

国際交流のねらいとしては、次のようなものを想定している：エンカウンター、フレンドシップ、言語学習（LL: Language Learning）、汎用的能力開発、プロフェッショナル、アカデミック。

エンカウンターとは出会いという意味である。異文化の人々と出会って、国際社会への関心を広げることをねらいとするような国際交流プログラムがこのカテゴリーに当てはまる。エンカウンターをねらいとするプログラムは、参加者は海外で意思疎通できるほどの語学力を必要としないという特徴があり、最も門戸の広い種類のねらいであると言える。1週間から2週間程度、海外でホームステイ等を行いながら、知見を深めるようなプログラムは多くの場合これに相当する。

フレンドシップは異文化の人々との友人関係を構築することをねらいとしたプログラムのカテゴリーである。海外で友人関係を深めるためには一定程度の現地語が話せる必要がある。このカテゴリーのプログラムでは、現地の人々と自由に過ごす時間が長く設けられている。

言語学習（LL）は、渡航先の現地の言葉を学ぶためのプログラムが該当するカテゴリーである。多くの大学が語学力を高めるためのプログラムを用意している。

汎用的能力開発は、リーダーシップ開発や汎用マネジメント能力の開発、問題解決能力の開発など、将来様々な領域のリーダーとしてグローバルに求められる汎用的能力を育成するためのプログラムが対応するカテゴリーである。例えば、様々な国から集められた参加者が様々なワークやプレゼンテーションを通して能力を高めるようなイベントはこれに対応する。

プロフェッショナルは、職業訓練をねらいとするプログラムに対応するカテゴリーである。例えば、教師、看護師、医師、エンジニアなどを育てる学科の学生が専門について学ぶプログラムはこのカテゴリーに相当する。

アカデミックは最も伝統的なカテゴリーであり、専門的学問領域について海外で学ぶプログラムである。例えば、海外の大学におけるサマースクール、特定の領域における研究開発の成果を競う大会などに参加するプログラムなどがこのカテゴリーに相当する。

(3) 評価次元とねらいを組み合わせる

プログラム実施のねらいに従って、それぞれの評価次元を想定することができる。そこで、表1に示すように、評価次元とねらいのマトリックスを構成することとした。横軸に評価次元、縦軸にねらいを設定している。表内の最左

列が示すのはすべての狙いに共通した評価次元である。

(4) 評価項目を提案する

表1に含まれるセルに、質の高いプログラムを構成するため貢献する条件を項目として書き込んでいく。これらの項目は評価活動に利用可能なようにある程度具体的なものである必要がある。しかし、あまりにも細かい事を項目として設定すると、一部のプログラムにしか適用できないものになってしまう。そのように多方面の観点から、適切な項目がどのようなものであるか議論しながら項目作成を進めている。

現在、本研究は大まかにいってこの段階にあると言える。

(5) 評価項目の分類や重み付け

評価項目の中には特にどのプログラムにも含まれるべき項目もあれば、あったほうが質の高いプログラムと言えるが選択的な項目だと言うべきものもある。また、比較したときに重要さが異なるために重み付けの程度を明確にしたほうがよい場合もあるだろう。この手順は本研究が次に進むべきステップとして残されている。

(6) ケーススタディ

手順(4)あるいは(5)まで進んだ段階で、実際に実施されたプログラムを試行的に評価し、評価項目の追加や削除に繋げる。

以上では、これらの手順が直線的なプロセスとして説明されたが、実際にはこの開発プロセスは循環的なものである。今後RIEPをさらに発展させるためには、具体的な実践を抽象化してループリックに落とし込むプロセスの後、抽象化したループリック項目から具体的実践を眺めなおしながら項目をより経験に近づけていくといったサイクルを続けていくことが重要である。

考 察

ループリックの適切な運用のために

現在、ループリックは世界的に普及しつつあり（Hafner & Hafner, 2004）、それと同時に本来のパフォーマンス評価のためのツールという意義を損ないかねないような運用方法も進んでいる。例えば、アメリカ合衆国において教員養成のために実施されているedTPAはその1例として挙げられる（Woodward & Beck, 2014）。edTPAはeducational Teaching Performance Assessmentの略称であり、米国で教職に就く事を希望する学生が教師として適性を持っているかどうかを評価するテストのことを指す。本来、先述のようにパフォーマンス評価では、被評価者は具体的にどのような基準である得点が付与されたか評価者の間で共有することができ、今後の改善点や改善方法を明確化することを支援するツールである。しかし、このedTPAでは、実習の様子をビデオに録画して教育測定専門企業に

表1. 国際交流プログラムを評価するルーブリック (RIEP) 試行版

		プログラムのねらい		
		共通項目	エンカウンター	フレンドシップ
プログラム の 評価 次元	参加者の選考	<ul style="list-style-type: none"> 参加者に向けた説明会を開催している 複数名による選考をおこなっている ライフスキル（時間感覚、提出期限などを守れている、危険回避）をチェックしている 参加に必要な経済的余裕があることを確認している 本人の意思で行きたいことを確認している 	<ul style="list-style-type: none"> 異文化に対する興味関心があることを確認している 語学力が十分でなくても受け入れている 	<ul style="list-style-type: none"> 異文化に対する興味関心があることを確認している 現地で日常会話レベルの意思疎通ができることを確認している
	受入機関の対応	<ul style="list-style-type: none"> 受入機関に複数の担当者がある 派遣元の複数担当者が受入先の複数担当者を知っている 受け入れ機関のスタッフが派遣機関を訪問したことがある 窓口担当者以外に国際交流の担当部署があつて、何かがあつたときには互いの状況を把握して、担当者にかわって対応することが可能 交流先からの来客時に対応についてある程度手続きが決まっている 交流活動（旅行、パーティー、レクリエーション）が組織的に運営されている チューター制度やラーニングパートナー制度等のサポート体制がある 	<ul style="list-style-type: none"> 受入機関の学生が参加している 日本語が話せる引率者あるいは現地担当者がいる 受け入れ先（地域、学校、行政）が派遣元の文化に理解を示している 受け入れ先の最低限度の治安と現状の理解をしている 	<ul style="list-style-type: none"> 受入機関に派遣機関の学生・生徒が在籍している 受入組織との連携が十分にできている（問い合わせ等） 日本語が話せる引率者あるいは現地担当者がいる 受入先（地域、学校、行政）が派遣元の文化に理解を示している 最低限度の治安と現状の理解をしている
	事前・事後指導	<ul style="list-style-type: none"> プログラムの目的や意義を伝えている Dos & Don'ts 集を作成し配布するなど、渡航先の文化について学ぶ機会を設けている 学習目標が設定されている 事後：学習者自身によって学習目標が設定されると同時に、それに基づいて自己評価をおこなう。 事後：自己評価に関するレポートを出すことを求めている 	<ul style="list-style-type: none"> 事前：目的、準備物、スケジュール、予算等が参加者に共有されている 事前：ライフスキルに関して指導をおこなっている 事前：渡航先の文化と歴史を学ぶ機会が設定されている 事後：成果について振り返り、他者（指導教員、友人等）と共有できる機会を設定している 事後：成果を活用した行動計画を作成するよう求めている 事後：報告会を渡航後開催している 	<ul style="list-style-type: none"> 事前：派遣先の自然や文化及び社会状況についてのオリエンテーションを実施している 事前：基本的なライフスキル、特にコミュニケーションについての一般的な理解を促している 事前：渡航先の文化と歴史を学ぶ機会が設定されている 事後：成果について振り返り、他者（指導教員、友人等）と共有できる機会を設定している 事後：成果を活用した行動計画を作成するよう求めている 事後：報告会を渡航後開催している
	プログラム内容	<ul style="list-style-type: none"> 他の留学生と知り合える機会を設けている プログラム参加者を招いた歓迎イベントが公式に企画されている 	<ul style="list-style-type: none"> 立食パーティーなど、お互いが自由に話せる機会を設けている 渡航先の言語が十分に話せなくても交流を促進するようなゲームやイベントが企画されている 	<ul style="list-style-type: none"> 立食パーティーなど、お互いが自由に話せる機会を設けている ホスト側とゲスト側の学生同士だけで出かけたりするなどの機会を設けている 留学生同士だけでなく、参加学生と渡航先の現地学生とが交流できる仕組みがある
	地域連携	<ul style="list-style-type: none"> 受入組織は地域社会で信頼されている 	<ul style="list-style-type: none"> 参加学生/生徒を受け入れることができる家族が渡航先に2つ以上確保されている 受入組織の学生/生徒の家族がプログラムに関わっている 	<ul style="list-style-type: none"> 参加学生/生徒を受け入れることができる家族が渡航先に2つ以上確保されている 受入組織の学生/生徒の家族がプログラムに関わっている
	オンラインの活用	<ul style="list-style-type: none"> 参加者がいつでもプログラムについて情報を得ることができるようなポータルサイト等が提供されている SNS等を活用したオンラインのコミュニティがある 	<ul style="list-style-type: none"> SNSを参加学生が活用できるようにオリエンテーションや学習課題が設定されている 	<ul style="list-style-type: none"> SNSを参加学生が活用できるようにオリエンテーションや学習課題が設定されている
	参加者評価	<ul style="list-style-type: none"> プログラムの目標に応じた参加者評価をおこなっている 尺度評定だけでなく、パフォーマンス評価もおこなっている 	<ul style="list-style-type: none"> 価値や態度の変化を測定している 自己の活動について振り返る課題が設定されている 	<ul style="list-style-type: none"> 価値や態度の変化を測定している 渡航期間以外も年間を通じて英語利用の機会がある

表1. 国際交流プログラムを評価するルーブリック (RIEP) 試行版 (続)

		プログラムのねらい			
		言語学習	汎用的能力開発	プロフェッショナル	アカデミック
プログラム の評価 次元	参加者の選考	<ul style="list-style-type: none"> 学習目標の水準に応じた言語運用能力を備えている 学習目標の水準に応じた言語運用能力を備えている 	<ul style="list-style-type: none"> 参加者選考において全人格的な観点を考慮 学習目標の水準に応じた学習能力や適応能力を備えている 曖昧さに耐えうる忍耐力や持続力を備えている 目標を達成しようという意欲と潜在能力がある 協調性がある 他人の意見に耳を傾けて学ぶ力がある 	<ul style="list-style-type: none"> ライフスキル (時間感覚, 提出期限などを守れている) をチェックしている 参加者ニーズとの関連性をチェックしている 課題遂行に応じた言語運用能力を備えている 	<ul style="list-style-type: none"> 参加者は専門領域への強い関心と異文化へのある程度の関心を持っている 学問を追究するための専門領域に関する基礎学力が備わっている 学問的活動に参加できるだけの言語運用能力を備えている
	受入機関の対応	<ul style="list-style-type: none"> 活動に参加するための前提となる言語学習の機会が提供されている 	<ul style="list-style-type: none"> 活動に参加するための前提となる言語学習の機会が提供されている 	<ul style="list-style-type: none"> 第2言語として現地語を修得する学生のためのコースがある 	<ul style="list-style-type: none"> 専門領域を指導できる教員がいる
	事前・事後指導	<ul style="list-style-type: none"> 日常生活に必要な水準の現地語が使える程度に訓練される機会がある 渡航期間以外も年間を通じて英語利用の機会がある 	<ul style="list-style-type: none"> メンターが参加者を個別もしくは少人数指導している 事後：報告会を渡航後開催している 	<ul style="list-style-type: none"> 事前に計画書を作成させている 何を獲得・達成してくるのかを明確にする 事後：報告会を渡航後開催している 	<ul style="list-style-type: none"> 事前：APA Publishing Manualに従ったライティングのスキルなど留学先での学習に必要な内容を特定し、あらかじめ修得させている 事後：報告会を渡航後開催している
	プログラム内容	<ul style="list-style-type: none"> 学習中の言語を利用する探索的な時間がある 留学生以外の現地の人々と交流する機会が設定されている 	<ul style="list-style-type: none"> 与えられた課題を解決するための時間が十分に用意されている チームワークを深められる課題や活動が用意されている 課題について議論する場が設けられている 現実に深く関連づけられた協同問題解決課題が設定されている 	<ul style="list-style-type: none"> 参加者が十分な学習時間を利用できる 渡航先の学生と協同学習する機会が設定されている 日本では学べない学習内容が用意されている 	<ul style="list-style-type: none"> 短期間で効果的な学びが実現するような構造化された授業プログラムがある 参加者自身の判断で自由に探索できる時間がある さらに上級の研究機会が設定されている
	地域連携	<ul style="list-style-type: none"> 渡航先に派遣元の教員等とコネクションを持った人々や団体がある 	<ul style="list-style-type: none"> 渡航先に派遣元の教員等とコネクションを持った人々や団体がある ボランティア活動の機会がある 	<ul style="list-style-type: none"> 渡航先に派遣元の教員等とコネクションを持った人々や団体がある インターンシップや職業体験の機会が設定されている 	<ul style="list-style-type: none"> 渡航先に派遣元の教員等とコネクションを持った人々や団体がある
	オンラインの活用	<ul style="list-style-type: none"> オンラインでの課題において言語使用の場がある 	<ul style="list-style-type: none"> 課題について考えるための資料が提供されている 追加資料がある場合はEメールや掲示板などで随時提供される 	<ul style="list-style-type: none"> 専門的な学びを支えるためのLMS等が授業等で活用されている 課題遂行に役立つ資料が提供されている 事後学習の課題の途中経過を報告するツールとしてオンラインが活用されている 	<ul style="list-style-type: none"> 渡航先の大学に、参加者が専門とする学術雑誌等のオンライン・リソースが充実している。 課題遂行に役立つ資料が提供されている 事後学習の課題の途中経過を報告するツールとしてオンラインが活用されている
参加者評価	<ul style="list-style-type: none"> 事後：語学の習得程度を測定している 活動を振り返り、どのような言語力がついて、どのような力が足りなかったかを自己評価する 	<ul style="list-style-type: none"> チームワーク、問題解決能力、曖昧さへの耐性などのジェネリックな能力の伸びを測定している 価値や態度の変化を測定している 課題を振り返り、自己の成長を確認する 	<ul style="list-style-type: none"> 専門性の習得程度を測定している 専門に関する到達度の自己評価をおこなっている 	<ul style="list-style-type: none"> プログラム参加中やその後の論文等の学術的生産物を評価している プログラム参加によって獲得した新しいスキルを評価している 	

送付し、その評価得点がフィードバックされるものの、なぜそのような得点になったのか被評価者は知ることができない。

そのため、本節は本論文が提案するルーブリックが濫用されないために、ルーブリックが適切に開発・運用されるための原則についても併せて提案したい。一般的に考えて、ルーブリックが適切に開発・運用されるための条件として筆者らは以下の4点を提案したい。

- ・ルーブリックの項目について予め評価主体と評価対象者との間で共有される
- ・評価のプロセスが評価主体と評価対象者の間で共有される
- ・評価結果を得た評価対象者が改善のために何をすればよいかヒントを得る事ができる
- ・ルーブリックの項目は評価主体と評価対象者の間での相互交渉を経て継続的に改訂される

本研究では、国際交流プログラムのねらいと評価次元を組み合わせるにより、交流プログラム評価について、より高次の概念枠組みを構築・提供することを試みた。ただし、このことは特定のプログラムが特定のねらいだけに属するというを示している訳ではない。たとえば、表1におけるプロフェッショナルが主なねらいであったとしても、フレンドシップの要素も兼ね備えているプログラムも多いだろう。そういった場合には、そのプログラムを評価するためには、プロフェッショナルとフレンドシップの両面に渡って評価をおこなうことになる。

今後、実際のプログラムへの評価実践を積み重ね、実践と理論の往還を通じて、学習者やプログラムの実態をより的確に捉えることのできるようRIEPを常に改訂・洗練していく必要がある。

引用文献

- Hafner, J. C., & Hafner, P. M. (2004) Quantitative analysis of the rubric as an assessment tool: an empirical study of student peer-group rating. *International Journal of Science Education*, 25(12), 1509-1528
- 香川大学教育学部中川恵正研究室 (2015) 児童・生徒のためのモニタリング自己評価法：ワークシートと共同学習でメタ認知を育む, 富田英司 (編), ナカニシヤ出版
- 河合淳子 (2011) 大学における学部学生の留学促進, 留学交流
- 田中耕治 (2008) 教育評価, 岩波書店
- Tomida, E., Chikamori, K., Nakayama, A., Ono, Y., Ohtani, C., and Yamamoto, A. (2014) *Developing Evaluation Framework for Short-term International Exchange*. A paper presented at JUSTEC 2014.
- Woodward, J., and Beck, T. (2014) *The edTPA: A national test for assessing initial teacher certification*. A paper presented at JUSTEC 2014